The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「すごいことが起こる出会い」を求めて
Author(s)	神里, 達博
Citation	Communication-Design 特別号. 2016, 1, p. 200-211
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55647
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

INTERVIEW 05

Tatsuhiro Kamisato × Naoki Homma

「すごいことが起こる出会い」を求めて

神里 達博

聞き手：本間直樹

PROFILE

神里 達博 ｜ Tatsuhiro Kamisato
千葉大学教授、朝日新聞客員論説委員
2012 ～ 2015 年度　科学技術部門　特任准教授

専攻は科学史・科学技術社会論。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得満期退学。博士（工学）。著書に『食品リスク』（弘文堂、2005）、『文明探偵の冒険』（講談社現代新書、2015）など。

「知の方法論」をカタマリとして教えること

―― 神里さんはもともと科学技術庁におられたのですね。

ええ、もう大昔のことですが。役所を辞職して、大学院に戻り科学史を勉強し、そこから三菱化学生命科学研究所、RISTEX（社会技術研究開発センター）、東大の原子力工学の GCOE を経て、阪大に参りました。

―― CSCD は「科学技術コミュニケーションセンター」ではなく、アート部門や科学技術部門などいくつか異なる部門から成り立っていますが、そういう組織のあり方や状況をどう見られますか。

いろいろなものが混じっているからいいのだと思います。特に大学は、芸術系とそうでない分野の間の谷がとても深い。東大にすら芸術系の学部はないですからね。旧帝大では九州大学に芸術工学部がありますが、あれは九州大学に九州芸術工科大学が合併したものですからちょっと違いますよね。歴史的には、本来、遠くないはずのものが完全に分離されてきた、ということの気持ち悪さを考えると、CSCD はすごく画期的で楽しいところ。私は、そこに一番価値があると思っています。「価値」の意味は異なりますが、欧米などでも「儲かるもの」は同じ方向みたいですよ。

―― 儲かるとは。

今、先進国で、いわば「商売のタネ」になっているのは、実は複合領域がとても多い。とりわけ、アートとサイエンスを複合したようなところで新たな価値が生まれているケースが多いです。アップル社のやり方などはまさにそうですよね。イノベーションという言葉を皆、いろいろ間違って使っていると思うのですが、本当の意味でのイノベーションは「違うものと違うものが出会ってすごくなる」あるいは「すごいことが起こるような出会い」ですから、そういう意味では違いがあるもの同士が出会うことは、すごく創造的なことです。出会うためには時空間を共有しないといけないので、サロンのような場所を作るという構想もよく聞きます。心理学者とか政治学者、社会学者といった全然違う分野の人と日常的に飯を食ったりする中でアイデアが生まれることもあります。新しくておもしろいものは、自分といわゆる血筋が全然違う、コミュニケーションしにくい人と話をする中で生まれると思うのです。そういう意味でアート部門があるということは、もう圧倒的によいことだと思います。

―― その一方で、日本の組織を見ると優等生型の人が圧倒的に多いかもしれません。その中でどうすればいいでしょうか。

要は戦略だと思うのです。いつの時代も最先端にいる人はまあ、「ちょっとおかしい人」に見られ、その時の体制からするとある種、「危険思想」と見なされることが普通ですが、同時に、将来的にはその仲間が増えていくこともよくある。もちろん単なる特殊な人で終わってしまう場合もあるでしょう。しかし、戦略をきちんと考えればその「新しい変人」に共感を持つ人もたくさん見つかると思います。ある意味で、要領良くやることが大事なのだろうと思います。そして、そういうオカシイものを社会に受け入れて貰えるかどうかというシーンで最も大切なのは、案外、マナーや礼儀だと、最近強く思うようになりました。自分自身、「礼儀正しいアブノーマル」だと思っています。昔、やっぱりアーティストの友人が私をそう呼んでくれたんです。

―― 研究だけではなく教育というものを視野におさめた時に、学際的な教育とか専門主義を超えるようなことは、思い切り若い人たちに教えられるものではないという感覚があるのですが、どう思われますか。

確かに。しかし、なんだろう、メタレベルで考える、つまり一個「次数」をあげれば、「品質を保証できる教育をやっています」と胸を張れるのではないかという気がします。具体的には、「専門的な知識体系そのものを、一つのカタマリとして扱う、というような大づかみな知の方法論を教えているのです」、と標榜すればよい。

ただ、やはり教育の主人公は学生です。どのくらい教育効果をあげられるかは、学生個々人にどのくらい「学び」に対する貪欲さや切迫感があるか、と関係してくるでしょう。自分の現状がどうにもならない、何とかしないと生きていけないよ、というような度合いが高い学生のほうが、やっぱり動きやすい。一方で、意識が強すぎても空回りしたりすることもあるでしょう。人によって「心のフック」というものはいろいろなところに、意外なところにあると思います。しばらく話をしていると、それが分かってくる。そういう学生との淡々とした、しかし大切な対話の時間を持てる余裕が大事だと思います。

コミュニケーションをデザインする場の必要性

―― 東京でなく大阪に CSCD があることのメリット、デメリットについてはどう思いますか。

大阪に来て私が最初に思ったことは、町の看板に横文字が少ないことです。あと、中年男性の顔がどーんと描かれた看板があったりする。比較すると東京では、若い女性と横文字が多い。思いのほか東京とは価値観が違うのだなと思いました。大阪は戦前、陸軍がすごく弱いので有名でしたよね。全体的に、国家主義的傾向が明らかに薄いですね。東京で何かやろうとすると「お上はどういう意向ですか。ルールは何ですか？」とすぐに中心を見る人が多いので、何をするにも面倒くさいです。大阪だから CSCD のような活動ができたのではないでしょうか。

── 京都ではどうでしょうか。

私も京都のことはよく知らないのですが、直観的には無理だろうなと思います。京都も「帝の町」だからです。私から見ると、京都と東京はよく似ていて、東京は京都をコピーしたんだなあと思うところはかなり多い。ところが大阪は全然違う。こう言ったらなんですが、たとえば臨床部門の西川勝さんみたいな迫力のある方は他の大学にはおらんでしょう。そこが大阪大学のすごいところ。風土的に東京にはない風通しの良さが間違いなくあります。

たとえば電車の中とかで客同士の小競り合いなんかがあると、東京だと皆知らない振りをするんですよ。でも、大阪ではたいてい仲裁人が 2、3 人入るじゃないですか。「社長、今日は疲れてるんやろう、よう分かるで。兄貴も少し謝まらんか」などと言う人がいる。時には全然違う話をしながら喧嘩に割り込んでくる人もいる。「自分な、東京で 6 年働いてました。電車乗る時は怖かったですわ。ほんま、痴漢やーって。3 回見ましたで。せやけど、こんな（満員）ですがな。あれは間違われますわ、ほんま。せやから自分、電車に乗る時は、もう、いっつもこうでしたわ」と言って、両目を見開いて思い切り万歳をする。そうなるともう皆が笑って、何に怒っていたか忘れてしまいます。御堂筋線のなかで、本当にそういうシーンを見て、私はものすごく感動しました。そういう形で、コミュニケーションによってローカルに解決されていく。もちろん全部が全部そううまくはいかないとは思いますが、社会のデフォルトのコミュニケーション･モードが､東京とは元々全然違う。なぜ大阪の人は皆こんなにコミュニケーションが好きなのだろうと思います。

元々、京都と大阪と奈良、さらに神戸というようなネットワークの中でそれぞれのキャラクターが培われてきたわけです。その中で京都の風土に外国から入ったものをくっつけたら東京になると私は思うんです。

── うまい表現ですね。

世界の中でグローバルなことをやる時には確かに東京は便利な街だと思います。世界とつながっているのも事実です。そういう街はそういう仕事のやり方をすればいい。でも、そんな街はいっぱいは、いらない。

── 翻って私たちの活動を考えると、「コミュニケーションデザイン」というものは何でも切れる刀ではなく、誰もが試みればいいわけではありませんね。

確かにそうです。システムの中ではマイナーな存在でしょう。ただ、大きなシステムを維持するためには必ずそういう存在がないとシステム自体がいつか自己崩壊してしまうような危険性があると思います。

なんだろう、たとえば世界が地滑りを起こしているとしたら、誰かそこに旗を立てる人が必要でしょう。何カ所かに基準になる旗を立てることで、その間隔がずれていないか、距離がどんどん離れていっていないかといった状況を把握することができる。でもそれは全員がやるべ

き仕事ではない。たくさん旗を立てすぎても意味がない。CSCD の活動に置き換えると、社会の至るところで起こっているコミュニケーション不全の問題を「どうしてなのだろう」と考える人は必要だけれど、皆が同じように原理的なことを考える必要はないと思うのです。いろいろなコミュニケーション不全のタイプを持ちよって、それをお互いにコミュニケーションして見ていきながら、新たなコミュニケーションをデザインする。ということはつまり、コミュニケーションについてのコミュニケーションですよね。メタのコミュニケーションを考える場所は、たくさんはいらないけれど、いくつかは必ず必要。とりわけ、時代状況として、これはすごく重要だと感じています。

── それは「大人と子どもの違い」でもあるような気がします。たとえば道に捨てられているゴミを見て、子どもは自分が捨てたものではないから放っておくけれど、大人は拾って近くにゴミ箱がなかったら袋にいれて持って帰るという話で、要はそんな大人が世の中に 7% くらい必要だけれど、それが最近減ってきているらしいのです。

すごく共感します。エリートとは本当はそういう人のことを言うはず。エリートという言葉は、今の日本の社会の中ではものすごく誤解されているので使いにくいのですけれど、「自分の得にはならないことだけど先輩にやってもらったので自分もやるか」と言える人が大人であり、社会全体の問題において、そういう役割を担う人こそがエリートである。自分がもらった球を次の人に渡すことの大切さに気づくことがまずは基本で、その上で、もう少し面倒なことでも頼まれずともやろうとする人が定義通りの本当のエリートです。そういう意味では、コミュニケーションについての問題をコミュニケーションで考えるなんてことを、頼まれてもいないのにわざわざやろうとする CSCD の試みは、たいしたものだと私は思います。

ところが、それを見て、「すごいことをやろうとしている」ということが分かっていない人が多すぎるように思います。この環境の素晴らしさ、貴重さを皆分かっていないのだと思う。ここだからできることをやってほしいと思います。要するに、「学際じゃないもの」は、ここでは控えてほしいと思う。普通の専門的な研究は他でやればよろしい。もったいないです。ただ、私も研究にコアがないのはダメだと思っています。学際とは、学と学の間で生まれるので、学際だけがぽつんと存在するということは有り得ないわけです。だから、個別の研究に基づくまとまった知識体系も当然、大事。それを否定しているわけではありません。

だからやはり、重要なのは戦略です。当然ですが大学というシステムの中でやっていく以上は、他の人たちに「ちゃんとした大学の先生である」と見えなくてはいけない。そのために、面倒でもやらないといけないことがあります。その上での、学際。志の高いことをやろうと思っていても、それが周囲からきちんと評価されないと、少なくとも戦略としてはまずいと思います。そういう意味では、学生への教育も順調で、CSCD に魅力を感じる人、応援してくれる人が増えているのですから、何らかの形でこれまでの財産を継承することを考えたほうがいいと私は思います。

そのためには形式ではなく実をとるべきでしょう。つまり、なんだろう、人員とかポストとか、そういうことではなく、実践の態度、「構え」みたいなものがきちんと伝承されることが

大事でしょう。最近「DNA が残る」という言葉をよく聞きますね。この表現は私はあまり好きではありませんが、要するに本質を残すことが大事だろうと思うのです。

臨床的であることとサポートの違い

―― 先に指摘された「コミュニケーションが起こしている問題をコミュニケーションによって解消する」という定義は、実はグレゴリー・ベイトソン影響下の家族療法から着想を得たものです。改めて伺いたいのは、コミュニケーションが起こしている問題をコミュニケーションで解決するという理念はここで共有されているでしょうか。

私もよく分かりませんが、皆で共有するのはなかなか難しいと思います。その中で「臨床的」というコンセプトは、非常に重要ではないでしょうか。たとえば原子力の問題などを考えると、臨床的にほぐしていかないと、どうにもならない話ばかりです。

―― その「臨床的」とは、どういう意味でおっしゃっていますか。

私のイメージは、問題に対して直接対峙して解決しようとするのではなく、物事が起こっている現場にまずは寄り添って、ただ一緒にいる、傍らに立つ、というようなイメージです。原子力の問題などはその典型で、「あいつが悪い」「この物質が悪い」「その政策が悪いのです」というような話は結局、問題解決にはつながらないと思うのです。「大変でしたね。原子力って大変ですよね。いろいろありますものね」などと、静かに共に感じることが大事なのではないかと私は思います。そうすることが遠回りのようでも、結果的に原子力の問題を解決していくための、最短距離なのだと思います。原子力の問題こそ一番、臨床的コミュニケーションをしないといけない分野ではないでしょうか。

―― 物事は本人が自分で模索して解決するしかないもので、周りが手を出すことはできない。それでも一人で模索することはできないから、その時に基本は一緒にいて時々「社会から見るとこう見えているよ」とか「こういうふうにいわれたら普通は腹がたつよね」というようにちょっとずつ言葉をかけ、その中で本人が悩みながら模索していくのに寄り添う。それは世間的には「サポート」と呼ばれるのだけれど、多分本当の意味でのサポートではないですね。「臨床的である」ことと「サポート」とは違います。

分かります。たぶん、そこに何重もの倒錯がありますよね。私が前から気になっているのは、時々、単に批判せず、ただ肯定して受け入れるのがよい、という考え方と混同される場合があることです。「世界はあなたを見捨てていないですよ」あるいは「想像を巡らせることができる人は、きっといますよ」、くらいのメッセージを送るところで踏みとどまらないといけない

と思う。でも、「ただそのままでよい」「あなたは何にもしないでいい」「今のあなたのまま生きればよい」となると全く臨床的ではないと思う。そう、そういう問題を扱うのは演劇がいいと思います。先ほどの原子力の問題も含め、そういう「臨床的」なるものを蓮行さんなどに正確に演劇にしてほしいと思うくらいです。

もちろん、それでもいよいよ大変になって、緊急モードになった時に「助けてくれ」と言われて、支えるのはまた違う話です。当たり前ですが「平時」と「戦時」を分けなくてはいけない。「戦時」はサポートしなくてはいけないのですが、「平時」にサポートすると甘えになり、依存になって、最後はアディクト、患者になってしまうのではないでしょうか。

── 患者にするほうが都合のいい人たちがいっぱいいるから、ああいうサポート体制になってしまうのでしょう。

確かに。それは一つの「母性的権力」なんでしょうね。蜘蛛の巣のような。これはたぶん、日本社会のかなり根源的な問題で、役所などは母性的権力のかたまりだと思いますよ。たとえば役所のお金の付け方にも出ている。「あなたがもしやりたいのなら、援助しますよ」というものがある。これは具体的には「補助金」と呼ばれるものです。これは一見相手の意志を尊重しているようにも見えますが、実は失敗したら逃げられますからね。「いや、あなたがやるというから、サポートしただけです」と言われてしまう。でも、サポート無しでは生きていけないような状況になってはじめて、そういう制度を動かすことが実は多いのではないかな。逆に、「俺の責任でお前にやらせる。やってみなさい」という父権的なやり方は言ってみれば「交付金」ですが、どうも流行らない。大学も運営費交付金が減る傾向にありますが。

── 父母にたとえて問題をうまくタイプ化されましたが、一方でそれはじっさいに母親のすることではない気がします。

はい。まあ、いわゆるユング心理学のアーキタイプのようなもので説明すると分かりやすいかな、と思ったのですが。ユングは毀誉褒貶が激しいので、適切なたとえではないかもしれませんね。ただ、こんなふうに、いろいろな言葉でお話することは、それ自体豊かなことだと思うのです。

実際のコミュニケーション教育について考えますと、いきなり本質的なことをやっても学生にはありがたみが分からないと思うのです。たとえば「普通の哲学がこんなやり方だからこそ、鷲田さんの哲学のやり方はこんなにおもしろい」ということがあるわけであって、臨床哲学を何も知らないと「これ、単に茶飲み話をしているのか？」と思う人もいるでしょう。さきほど、学際の話をしましたが、やはり基準となるべき、きちっとしたベースとなる知識や講義は必要なのです。地滑りの話での「旗」と似ているかもしれません。その一部は他学科でやってくれるかもしれませんが、場合によってはわざと、学術的でソリッドな内容も最初に上手に組み込みつつ、途中からコミュニケーションデザイン・センターのコンセプトを表に出していくほうが、より多くの人がスムーズに CSCD のありがたみと言いますか、本当の意味での「すごさ」

を実感できるのではないかと思います。

講義をしていてもそうですね。高校生や専門家、一般の人なども含め、これまでいろいろなところで科学技術論の話をしてきましたが、科学技術のリアリティを全く知らない人にそういう話をしても、やはりその意義やありがたみがあまり伝わっていないかな、と感じることは多かったです。その点では、自分の専門分野ですでに科学技術を学んだことがある理系の大学生や院生、また専門家は、実際に科学技術に取り組んでいる中で、どうにもこうにも自分の中で矛盾を感じていることが多く、当然そういう人のほうが、私たちのやっている仕事の意味が伝わりやすい。逆に高校生や、完全に文系の学生の場合、この時代を覆う科学技術に対する漠然とした不安感といった、市民感覚みたいなものはある。その点はもちろん良いのですが、どうしても科学技術のリアリティがないなあと思うことは多いです。それは当然のことなので、そういう学生たちには、科学技術論をやる前に科学技術の基礎を教える授業をやったほうがいいと思います。

―― せめて科学史をやるとか。

そうです。実際、「科学哲学」を全然知らないというので、私は去年から授業に少し組み込んでいます。科学哲学をやらず、ポパーもクーンも知らないで科学論をやっても仕方がないだろうと思いまして。学生には結構好評のようです。

―― やはり旧教養部の勉強が大事だということですね。たとえば科学哲学の授業は何時間くらいあればよいですか。

本来なら最低でも 15 回はやらないと伝わらないなと私は思いますが。

―― 科学技術コミュニケーションの授業の中に、科学論とか科学哲学が 1 コマあったほうがいいと。

現状では「科学技術社会論基礎」の 15 回の中の 2 回しかやれていないのですが、ないよりはいいと思っています。

―― 理想を言えば、それをセンターの内部でやるのではなくて、関連の分野の専門家に専門以外の学生向けの授業として依頼するという環境が作れるとよいのですね。

確かに。また、その逆も当然あってよいでしょう。

―― たとえば理系の人にはちゃんとした芸術史を教えるとか。

芸術史がいいかどうか分からないですけれども、私自身も若い時にそういう勉強をしたかった

ですね。

リベラルアーツ構想

―― CSCD の教育プログラムは現代的な意味での「リベラルアーツ」の側面があると言えるのですが、リベラルアーツと言えば、たとえば文系数学とか文系の物理学などあってもいいと思うのです。でもそういうことをやりたいという人がいない。文系分野であっても、文学部の人に社会学を勉強しろといっても今や勉強しないですね。自分の学生時代を振り返ってもいろいろなものを学びたいと思っていた私などは、ものすごくマイノリティでした。

私も数学に挫折した人のための数学教室というものをやってみたいという思いはあります。実は私、昔は数学が結構得意だったのですが、今は全然使っていません。文系の仕事のスタイルがすっかり体に浸透した今、もし数学を皆さんに教えようとすると、きっと昔とは相当違うことを語ろうとすると思うのです。カリキュラムの中味や順番も全然違う組み立てにするだろうと思います。

―― 教養部は解体されましたが、ギリギリ私の世代までが阪大でもリベラルアーツが行われていました。今は教養部がない世代ということで、先ほどのような現象に帰結しているのではないのかと思います。全く自分の選び取る分野を外から見る気配がない。今はどちらかというと、専門主義を批判するというような振りだけは流行っているけれども、他の学問と比較するのではなくて、自分の分野と社会をいきなり比較しているようなところがあります。

「セカイ系文学」というものがひところ流行りましたよね。描かれている男女がいきなり世界を救うというような感じで、個人とセカイの間にあるはずの地域社会だとか政府とか、いろいろなことがすっ飛ばされている。今は世の中全体が、それこそ一種の「セカイ系」のような感じがします。ですから、普通に教養部を復活させるだけでもかなり我々の悩みは解決しそうな気がしますが。

―― つまりリベラルアーツというものをミニマムな形で CSCD において実践してほしいということですね。

そうしないと話が通じないですよねえ。

―― たとえば何科目くらい？

具体論は難しいですが、最低でも自然科学入門と、社会科学入門と、人文学入門のような 3

つくらいは必要かな。逆に、現実として学生は3つくらいしかやる余裕がないと思うのです。かつての教養部と同じですけれども、やはり人文・社会・自然みたいな感じの括りで教えるのが比較的やりやすいのだろうと思います。それを15時間に圧縮できれば、まだましになるでしょうね。社会科学を15回で全部やるということはえらく大変ですし、自然科学全部を15回で終わるということもすごく大変だと思います。でも、それほど圧縮度の高い授業はこれまで例がないと思うので、一度挑戦するのもありだと思います。

── オムニバス形式はだめですよね。

同感です。皆で一緒に教材開発をすることはいいと思うのですが、最終的には一人の人間の頭を通して語らないと、やはり何を言っているのか分からなくなるでしょう。そういう授業をするのはとても大変ですけれど、他の仕事はあまりなくて、専念が許されるような環境だったらやってみたいものです。今のままでやるということは全然現実的ではないですが、CSCDをみていて確かにそういう挑戦が足りない気がします。

── 足りない？

ええ。まずは、理系学生の社会科学の常識がかなり足りないように見えます。たとえば憲法というものが政府を規制する装置であることが分かっていない学生がいます。憲法というものは何のためにあって、誰が誰に対する命令として発動されているのか、なども、どうも分かっていないのです。

── 政治も法律もサイエンスなのに、違う分野だと思っているのですか。

彼らのサイエンスは自然科学ですから、社会科学はサイエンスとは思っていないでしょう。理学と比べれば工学のほうがある意味、社会との関わりが大きいはずですが、工学の学生も、やはり知識としては知らないのです。真面目にやらなかったという子もいるだろうけれども、もう少し問題は根深い感じがします。以前勤めていた大学の理系学生の話ですが、彼は第二次世界大戦がソ連に対して日本とアメリカが組んで戦って勝ったものだ、と思っていたというのです。

── それは新説ですね。

なんとなくそう思い込んでいたのでしょうけれど、その間違いの理由は「世界史をやっていなかったからだ」と。少なくとも私たちの時にはもうちょっと一般教養というか、常識があったでしょう。以前、大学入試に出ない科目は教えないということが進学校で流行り、高3の最後に補講をするなど、社会問題になったことがありました。あのような受験偏重体制によって、高校時代に身につけるべき教養の基本もやせ細っているのかもしれませんね。

もっといえば、どうも理系の能力自体も落ちています。やはり以前勤めていたところの理系

の院生の話で、専門的な例ですが「テイラー展開」というすごく重要な話がわかっていなかったのには、びっくりしました。テイラー展開が分からないと、三角関数の本質が何なのかも分からないし、その先に複素解析という非常に美しい世界があるということも分からない。解析学の一番美しい部分に出会えないのです。そもそも高校までの数学というのは、数学の美しさではなくて、教えやすさと入試問題の作りやすさで設定されている側面が大きいから、数学の一番いいところというものは、あまり扱わないのです。かといって大学でそれを学べるかというと、私もそうだったけれども、教える方も学ぶ方も、なかなか難しいようです。結局、数学の一番おもしろいところ、美しいところは、普通に学校に通っていたら分からないと思います。

―― テイラー展開の考え方が生まれたのは何年くらいですか。

テイラーというのは人の名前で、18 世紀のことだと思います。解析学が発展していく中で出てくる。解析というと、理工系の技術屋は誰もが道具として使うことはできるのだけど、その美しさや、どういう点で何がすごいのか、ということがイマイチ分かっていないという人も多いように思います。私の場合、たまたま祖父が数学の教員だったり、父も企業内の研究所にいた影響で、数学についてはわりと子供の頃からセンスを養われた気がします。それでも、数学の美しさにしっかりと気づいたのは、科学史の大学院に入ってからかもしれません。理系でも、意外と工学部を出てエンジニアをやっていたり、あるいは医歯薬系の人などは、特段、数学についての美意識がなくても仕事は普通にできてしまう。しかし、そういう人でも受験を離れて改めて勉強してみると、「ああ、そういうことだったのか！」と気づく部分が、かなりあるのではないかと思うのです。そんなふうに勉強ができたらいいですね。大学というところは、そういう本質的な学びを、いつでも、縦横無尽にできる場所であるべきだと、私は信じています。

―― 私も狭い意味での専門を超えて「美しさ」というものを追求することが重要だと思います。そうやって美しさというものを各分野のなかに見いだしていけるということが「教養」であるし、知のインターフェイスにもなるのではないでしょうか。

全く同感です。「美」と「知」を、この大学という場で結びつけたいですね。

（2014 年 7 月 17 日 CSCD にて）